

【聖書箇所】ルカ福音書 12:22～34

22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。 23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。 24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。 25 あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。 26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。 27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。 28 今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。 29 あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。 30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。

31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。 32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。 33 自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。 34 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

1 「あなたはどこにいるのか」

創世記3章、アダムとエバが神の戒めを破って善悪を知る木の実を食べるといふ、人類最初の罪を犯した日が描かれています。その日、エデンの園に風が吹く頃、主なる神は園の中を歩きながら、「お前はどこにいるのか」とアダムとエバを呼ばれました。神の言いつけを破ったアダムとエバは神を避けて隠れていたからです。この時の主なる神と同じようにででしょうか。主イエスも私どもに、「あなたがたの心は、今、どこにありますか」と問いかけておられます。今日はこの主イエスのみ声をルカによる福音書12章から聴いてまいりましょう。

2 不安

今日の聖書箇所、主は繰り返し「思ひ悩むな」と仰います。この「思ひ悩む」というギリシャ語には、「生きる為の心配事の虜になってしまう」という意

味があります。心配事で心が占領されてしまう状況を言うのでしょうか。生きていく上での心配事があります。中でも、自分や家族を養うだけの食べ物を得る事ができるか？それは、人類が誕生した最初からの最大の関心事でしょう。小林一茶は世の中で一番怖いものは、「底が見えてきた米びつ」だと言っています。それに社会生活を送る上では着る物だって必要。「明日からの食糧を手に入れる目処がたたない。働きに行くのに着ていくまともな服もない」という状況に平気でいられる人は少ない、当然、心配します。

しかし、主イエスは「思い悩むな」と仰います。「心配しすぎて、その心配を自分の主人としてはいけない。不安に自分の心を支配させてはいけません」と主イエスはおっしゃっています。不安に心が支配されると私たちは冷静に客観的に状況判断する事ができなくなるから。「不安はかゆみのようなものだ」とも言います。痒くてたまらない時、かゆみから逃れようと思い掻き始める。しかし、ますます痒みはましてしまい、悪循環の果てにはめちゃくちゃ掻きむしって深刻な炎症を起こしてしまう事さえあります。不安もかゆみに似ているのです。不安で仕方なくなる、不安に心が占領されると、この不安から一刻も早く逃れる為に、私達は神から離れて罪を犯してしまうことが往々にしてあります。「盗み」等という犯罪を犯さなくても、不安から逃れる為にお酒やギャンブルに逃避する人もいるし、より立場の弱い人達に言葉や行いの暴力に訴える人もいます。他の様々な欲望を満足させることで、一時的に不安を忘れようとする事もあるでしょう。しかし、そうして得た安心は一時的なもの、結局、また不安になり心配になります。そんな時、私たちは、不安に支配されている、私たちの心は心配事に呑み込まれており、私達の心は、自分の不安の中に、自分の心配ごとの中にある・・・と言えるでしょう。

3 外に出よ

しかし、主イエスは仰います。「心配事の外に出なさい」と。それが「思い悩むな」という主の御言葉です。「心配事の外に出なさい」。詩編 39 編にはこういう祈りがあります。“ご覧ください。与えられたこの生涯は、わずか、手の幅ほどのもの。み前には、この人生も無に等しいのです。ああ、人は確かに立っているようでも、すべて虚しいもの”。この詩編のとおりです。私たちは確かに自分の力で立っているように考えがちですが、私たちの内に確かなものなど何もなく、神の方から眺めてみれば、人間は儚く消えゆくものに等しいもの。私たちの力は私たちが思っている以上にはるかに小さいのです。ですから、私たちは自分のできる事できない事をきちんとわきまえていかねばなりません。その為にも心を心配事の外に置くことが大事なのです。心配事から距離を置く事が大事。なんでもそうですが、物事の全体像を見ようと思うなら、離れて物事を見なくてははいけません。森の中に入ってしまったら、森全体を見る事はで

きません。巨大な横浜スタジアムのすぐそばまで来て中に入ってみたら、横浜スタジアム全体を見渡す事はできないからです。心配事もそれと同じです。心配事の外に出て確実に安全な所に自分の心を置いてはじめて、なすべきことが見えてきます。

4 心を神のみ前に置く

では、人の心にとって安全で確かな場所とは一体どこでしょうか。主イエスはなんと云っているのでしょうか。“22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。”とあります。22節、23節の「命」と「体」。命と訳されているギリシャ語には、「自我」「自己」「人間存在の主体」という意味があります。「考えたり、感じたり、意志をもって行動する主体となるもの」が命であり、魂とも訳されています。そして、体とは、人間の肉体のことをさします。父なる神は、この一人一人の「命」と「体」、肉体も含めた一人一人の人格全体をかけがえのない者、代わる者のない尊い存在と受け止めてくださっていると主イエスは仰っています。「あなたがたの命は食べ物より尊く、あなたがたの体は衣服より大切だ」。

5 鳥のことを考える

そして主イエスは仰います。「鳥の事を考えよ」。「考えよ」と言葉には、「注意深く観察し考えなさい」という意味があります。鳥は、旧約聖書の中では汚らしい鳥とされています(レビ記 11:15, 申命記 14:14)。鳥の中でも特に汚らしいと軽んじられている鳥でさえ、なんの労働もしないのに、神に養われているではないか。神はあなたたち人間を鳥よりも、はるかに価値があるものとしているではないか！鳥を注意して深く観察する事を通じて、創造者である神の慈しみ深い眼差しを思い起しなさい、そう主イエスは教えてくださっています。

6 野原の花

次に主イエスはおっしゃいます。27節「野原の花がどのように育つかを考えてみなさい」。「野原の花」と訳されているのは、別の訳では「野の百合」とあります。「野の百合」とは、イスラエル地方の丘に咲く紫アネモネの事だそうです。この花は、イスラエルの夏を華麗に彩ります。夏の夕立が終わった後、丘の斜面は、一面この花が咲き誇り、王者の紫の衣のようにきらびやかに輝き渡るのです。その野の花の一つ一つを深く観察するとは、「栄華を極めたソロモ

ン王よりも華やかで立派だ」と主イエスはおっしゃいます。ソロモン王とは紀元10世紀頃、イスラエル王国が最も繁栄した時代の王だと言われています。王国の富が極限に到達した頃の究極の王―ソロモンの贅を尽くした煌びやかな衣装でさえも、この野の百合の美しさには到底及ばない、と主イエスは語ります。しかし、その野の花の華やぎは、ほんの一日限りです。一日咲けば枯れていきます。イスラエル地方では木が少なかったので庶民の日常生活で火を起こす時は薪ではなく、枯れた野の花が用いられていたそうです。このようにたった一日の命の野の花、やがて炉に投げ込まれる草花でさえ、ソロモン王よりも美しく装おわせてくださる。そうであれば、ましてや、あなた方を美しく装わせない筈がない！と主イエスは仰います。

7 神の国を求めよ

主イエスが仰る事、本当だと思います。鳥や野に咲く花を見てそんな風に信じられれば素晴らしい事はない。だが、どうしたら信じられるのでしょうか？自然世界はともかく、私達人間世界の現実には悲惨です、こんなにも苦しいものなのだ、私はこんなに困っている！どこに私達の心をおくべき確かな場所があるというのか？―私達の湧き上がる疑問に主は答えます。31節。「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」主イエスは、「神の国にあなたの心を置きなさい」と仰っているようです。神の国とは、神の力が私達を支配している所という意味があります。神の王国です。神の国、神の支配下にあなたの心を置きなさい…と主は勧めておられます。そこはどこだということでしょうか。

8 死のドグマ

第二次世界大戦の頃、ドイツにゴルヴィツァーという牧師であり神学者がいました。カール・バルトの弟子であり、ナチスドイツに反対し教会闘争を戦った方です。この方が1940年の復活節に行った礼拝説教が本としてまとめられています。1940年、昭和15年という年は、ナチスドイツの勢力が頂点に達した年でした。フランスに攻め入りパリを陥落させたのも1940年、当時のナチスは向かう所敵なしという状況であり、第三帝国の力は頂点に達していました。当然、ナチスに反対していたゴルヴィツァー牧師への迫害も強まるばかりでした。仲間の牧師が不審な死を遂げたり、ゴルヴィツァー牧師の仕える教会に集う人々も減ってきました。希望などどこにも見えない、人の罪という闇が深く世界を支配していた1940年の礼拝で、ゴルヴィツァー牧師は、語ります。「この世界が信じてやまない教理、ドクマがある。それは“死んだら終わり”というドグマだ」。死んだらそれですべてが終わりだと信じ込み、私達は自分の滅びの不安、心配事に心を縛り付けられています。

しかし、私達人間が信じて疑わない“死んだら終わり”という死のドグマは、イエス・キリストの十字架と復活によって打ち破られた…そうゴルヴィツァーは語りました。主イエスは、私達人間の死を一人引き受けて十字架の上に決着をつけてくださいました。この世の滅びを引き受けてくださいました。そして、三日目に甦られました。死のドグマは打ち破られたのです。パウロは言っています。「死は勝利に呑み込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前の棘はどこにあるのか。」(I コリント 15:55)。死はイエス・キリストの十字架の勝利、復活の命に呑み込まれ、滅ぼされたのです。神の力によって、死から命を産み出す神の力によって死は打ち破られました。私達の命を強固に死への不安、滅びへの不安に縛り付けている「死の教義」は力を失ったのです。

9 甦りの朝

ですから、主イエスが仰る「神の国」—神の力が支配する神の王国とは、主イエス・キリストを復活させた神の力が支配している所と言ってもいいのです。そうです、「神の国」はまだその全貌を私達の前には現わしてはいません。まだこの世界は、死のドグマに支配されている所が多いにあります。主が「異邦人」と呼んでいる神を知らない人々が多くいるのです。神の国が完全に現れるのは、終わりの日。永遠の朝、神と私達人間が顔と顔を合わせてまみえる甦りの朝。この世とは全く異質な新しい世界が現れるという時。今はおぼろげながらしか分からない神さまの事をはっきりととらえることができるというその時です。

ですから、主イエスが「ただ、神の国を求めなさい」と仰るのは、私達自身の心を、私達自身を終わりの日の甦りの朝の光の中に置きなさい。そして、終わりの日から全てを見なさい…という事なのです。終わりの日から見れば、今、私達が肉体をもって生きているこの命は儚いものです。私達が心惹かれる沢山の富みも、人からの賞賛も、すべて消えゆくもの。いやそれどころか、富や称賛や権力が、他の人の苦しみや悲しみ、痛みと引き換えに手にいれたものであるなら、害悪にしか過ぎないものと見えるでしょう。私達が深くとらえられている心配事の正体も見えてくるし、今現在何をすべきで何をすべきでないか？という知恵も与えられることもあるでしょう。

ゴルヴィツァー牧師を初めナチスとの教会闘争に生きた牧師達も、自分達の心を、神の力の支配する世界、甦りの朝へと置いて、死のドグマの支配する世界の厳しい戦いを闘い抜いたのでありましょう。

10 礼拝

では、神の国はこの地上には全く姿を現していないのでしょうか。甦りの朝の光は私達の所には届いておらず、私達は真っ暗闇の死の教義が支配する世界でただひたすらに終わりの日を待ち望むしかないのでしょうか。

悪霊を追い出したイエス様について「悪霊の頭ベルゼブルの力で追い出したのだ」と言い、頑なに主に反抗する律法学者達に対して、主ご自身はこのように仰っています。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」(11:20)。そう、神の国は既にこの地上に来ているのです、主イエスを自分の救い主として受け入れる時、主イエスの十字架と復活を信じる時、私達は、この地上に生きながらも、遠い甦りの朝、終わりの日に完全に現れる神の国に生きる事が出来ると主は仰っています。

その甦りの朝、終わりの日の神の国がこの地上に最もよく現れていたのが、主イエス・キリストが十字架で死んだ後に甦られた日曜日の朝でありました。人間の歴史の中でもっとも美しい朝であったことでしょう。その朝に立ち会いたいと心から思います。

だからこそ、私達は主の甦りの朝を思い起す為に毎週日曜日に集まって、礼拝をしているのです。永遠の甦りの日に、私達の心を置くために、私達は毎週日曜日、それぞれの場所からここに集って、父なる神を礼拝しています。私達は神を礼拝する事を通じて、心配事の中に私達を閉じ込めようとする死の力に打ち勝ち、甦りの朝の光、永遠の命を産み出す甦りの力が満ち溢れる終わりの日に自分自身を置くのです。

私達がそれぞれに過ごす六日の世界は、まだまだ死の力が強く支配する世界です。だから私達は六日に及ぶ、死が支配する生活の中でずれていった自分の位置を、甦りの朝の光の内に正常に戻して頂くのです。自分の心を甦りの朝の中に再び引き戻します。そして、終わりの日から、現在を眺め、現在なすべき事を示されて、生きていく力を与えられます。死の力が支配する現在の苦しみに巻き込まれ、心配事に捉えられてしまいそうになる時、「アッバ、父よ」と神の御名を呼び叫び、あなたによって助けられて終わりの日に再び立たせて頂く歩みを与えられます。そうしてこそ、私達は神の国に生きることができます。

11 持っている物を手放す

神を礼拝し、甦りの朝の光の中に心を置きつつ、闇の力が支配するこの世界を生きてきた人々が教会には沢山います。そのお一人を紹介したいと思います。私の母教会である広島ナザレン教会のM. N姉妹です。N姉妹は昨年91歳で召天されました。広島で生まれ育ち原爆も体験されています。日銀広島支店でずっと働いていました。結婚後も出産後もやめる事なく定年まで働いたと聞いています。いわゆる職業婦人のはしりのような方でした。彼女は働いて得たものを惜しまず人に献げる方でした。身寄りのない方々の葬儀を出すことも普通にあったそうです。勿論自分がお金をささげたというような事は一切口にしませんでした。ただ牧師だけが知っていること。なかでも印象深い逸話があります。広島ナザレン教会に家族ぐるみで通ってきている母子家庭がありました。

いつも生活は厳しかったようです。教会の昼食に出る一杯200円のおうどん代が払えない、「子ども達はともかく大人の自分がただで食べるのは申し訳ない」と母親はいつも礼拝が終わると、すっといなくなっていました。N姉妹は、この家族にずっと援助し続けていました。それも牧師夫妻以外には誰にも言わずに。牧師夫人は、その家のお母さんに「教会のある方からの献げものです」と言って毎月お金をひそかに渡していたそうですが、母親はてっきり牧師夫妻が用立ててくれたのだらうと思い込んでいたそうです。誰もN姉妹がそのような事をされていたとは知りませんでした。明らかにされたのは、N姉妹が亡くなった時。母親の心を支えていたのは、実際の金銭的援助だけではなく、自分達のことを心にかけて、自分達の為に持っている物を差し出し祈ってくれる人が確かに存在しているという現実であったと思います。今、その家庭の子ども達はみなそれぞれの道をしっかりと歩んでいます。N姉妹の心は、終わりの日、永遠の命に甦る朝の光の中に堅く立っていたのであらうと思わされます。主イエスが「あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」と仰っているように。

N姉妹だけではありません。主イエスはいつもいつも、私たちに呼びかけています。「あなた達の心はどこにいますか」。この問いかけに十字架と復活の主イエス・キリストの父なる神を礼拝し続けている私達は応えたい。「私どもの心は、今、甦りの光の中に立っておられるあなたの傍らにあります、そして私どもの体は、甦りの朝の光に照らし出されて、今、この地上を平安の内に歩んでいきます。」と。